

機関番号：12604

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720191

研究課題名 (和文) 日本語学習者の「場面による文法形式の使い分け」の実態—母語話者との比較を通して

研究課題名 (英文) How do Japanese language learners choose between synonymous grammatical forms according to the situation? —A comparison with native speakers—

研究代表者

小西 円 (KONISHI MADOKA)

東京学芸大学・留学生センター・研究員

研究者番号：60460052

研究成果の概要 (和文)：

本研究の目的は、1) 日本語学習者が場面による言語形式の使い分けをどのように行っているかを明らかにする、2) 日本語母語話者と日本語学習者の場面による言語形式の使い分けの相違点を明らかにする、の2点である。これらを明らかにするために、原因・理由表現の「から」「ので」、および、伝聞表現の「そうだ」とその類義表現を研究対象に、調査・分析を行った。その結果、1) 日本語学習者の類義表現に関する意識と運用の実態にズレがあること、2) 日本語学習者は、これまでの日本語学や日本語教育で扱っていた単位とは異なる単位で、類義表現を使い分けている可能性があること、3) 日本語母語話者は、多様な出現形を場面ごとに使い分けており、レンマに多様な出現形を集約して記述することはできないこと、が示唆された。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this research is to clarify the following two points:

1) How do Japanese language learners choose between synonymous grammatical forms according to the situation?

2) What is the difference between Japanese language learners and Japanese native speakers in choosing between synonymous grammatical forms according to the situation?

In order to clarify these points, this research investigated “kara” and “node”, used to express cause or reason, and “souda” and its synonymous expressions used to show hearsay.

The three results suggested by the research can be stated as follows:

1) There is a gap between the Japanese language learners’ explicit knowledge and actual usage of synonymous expressions.

2) Japanese language learners choose between expressions that differ from the expressions treated as synonymous in the fields of Japanese linguistics and education.

3) Japanese native speakers choose according to the situation various synonymous forms that can not be summarized into a lemma.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	900,000	270,000	1170,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：日本語教育、第二言語習得、実態調査、日本語文法

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語教育における必要性

近年、日本語教育では、学習者や学習目的の多様化が叫ばれている。そのような日本語教育において、万人に通用する1冊の教科書やシラバスを提供することは困難である。各学習者のニーズに合わせた柔軟なシラバス作成のためには、文法項目とその使用環境に関する詳細な記述が必要である。また、学習者がレジスター（場面に応じた適切な言語形式の使い分け）を意識し、適切な運用を行うためには、言語形式と場面との関連を記述する必要がある。

(2) これまでの研究手法の問題点

① これまでの日本語教育における文法研究は、レンマ（lemma：辞書の見出し語のようなもの）に出現形を包括させる研究手法が主流であった。そのような研究手法では、具体的な使用環境と形式との記述が行えない。

② これまでの研究では、文法形式にのみ着目し、その使用環境について言及する研究が少なかった。文法的な規則だけでなく、使用に関する慣習や使用の傾向を明らかにすることにより、学習者の言語運用を支援することができる。

③ 日本語学習者の言語運用をテーマにした研究で、レジスターに焦点を当てたものは少ない。日本語学習者と母語話者の言語運用を場面ごとに比較することにより、日本語教育におけるレジスター教育に対する具体的な提言を行う必要がある。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的

本研究の目的は次の2点を明らかにすることである。

- ① 日本語学習者が場面による言語形式の使い分けをどのように行っているか。
- ② 日本語母語話者と日本語学習者の場面による言語形式の使い分けの相違点。

(2) 対象項目

上記の目的のために、具体的には以下の項目を研究対象とする。

- ① 原因・理由表現の「から」「ので」

- ② 伝聞表現の「そうだ」とその類義表現

3. 研究の方法

本研究では、具体的な調査目的および調査項目を設定した質的調査を中心に研究を行った。以下、その手法について述べる。

(1) 具体的な調査の手順

具体的には、以下のようにデザインされた3種の調査を行った。

① あるテーマに関する対話

日本留学のエピソードを、調査実施者と調査協力者との一対一の対話形式でアウトプットしてもらう。日本語学習者に対して実施した。

この調査により、主に丁寧体発話における言語形式の使用傾向を把握することができる。

② インタビュー

調査協力者に作文を執筆してもらう。その後、その作文の内容や、書くときに考えたこと、言語形式の使い分けに関する意識などについて、調査実施者が協力者にインタビューを行う。日本語学習者に対して実施した。

この調査により、産出物のみからは抽出することができない意識を把握することができる。また、その発話をデータとして、調査協力者の発話における言語形式の使用傾向を把握することができる。

③ ある状況を設定した上での言語産出

調査協力者に具体的な知人A（親しい間柄の同級生および後輩）とB（あまり親しくない間柄の先輩）を想定してもらう。その後、学内イベントについて担当者から聞いた情報を、AおよびBに、口頭および携帯メールで伝えるというタスクを行う。口頭で伝える場合は、調査実施者をAおよびBに見立ててタスクを実施する。日本語学習者および日本語母語話者に実施した。

この調査により、相手との親疎関係、文体、媒体、などを変数とした場合の、場面と言語形式の使い分けを把握することができる。

(2) 調査協力者

調査協力者は、日本の大学および大学院に所属する学生である。協力者の属性を表1および表2に示す。(1)の①および②の調査

に対する協力者は、日本語学習者の1から11までの11名、(1)の③の調査に対する協力者は、日本語学習者の1から14までの14名、および、日本語母語話者の1から10までの10名である。

表1 日本語学習者の属性

	日本語レベル	出身	学習歴	在籍機関(日本)
1	超上級	中国	14年	大学院
2	超上級	中国	14年	大学院
3	超上級	中国	16年	大学院
4	上級	中国	5年半	大学院
5	上級	中国	4年	大学院
6	中級	韓国	1年	学部
7	中級	韓国	2年	学部
8	中級	香港	6か月	学部
9	中級	中国	1年半	学部
10	中級	ドイツ	2年	学部
11	中級	ドイツ	4年	学部
12	超上級	韓国	不明	大学院
13	超上級	韓国	不明	大学院
14	超上級	韓国	不明	大学院

表2 日本語母語話者の属性

	主な言語生育地	在籍機関
1	中国地方	大学院
2	関東地方	大学院
3	オセアニア、関東地方	大学院
4	関東地方	大学院
5	関東地方	大学院
6	関東地方	大学院
7	北海道	大学院
8	関東地方	大学院
9	近畿地方	大学院
10	関東地方	大学院

4. 研究成果

(1) 原因・理由表現の「から」「ので」

① 目的

原因・理由の類義表現である「から」「ので」に関して、以下の2点を研究課題として調査・分析を実施した。

- A) 日本語学習者は「から」「ので」をどのように運用しているか。
- B) 日本語学習者は「から」「ので」の使い分けをどのように意識しているか。

② 調査協力者

調査協力者は日本の大学に所属する日本語学習者11名(表1の1から11)である。

③ 調査方法

実施した調査は、3節(1)①、②で示した対話とインタビューである。

④ 分析結果

研究課題A)に関して、以下のような分析結果を得た。

- ・ 「から」「ので」を比較すると「から」を使用する日本語学習者が多い。
- ・ 「から」「ので」の前接文体を見ると、中級レベルでは「普通体+から」が優勢であるが、日本語レベルが上がると「丁寧体+から」の使用が増える傾向がある。

研究課題B)に関して、以下のような分析結果を得た。

- ・ 両者を使い分けるべきものと意識している日本語学習者が多い。
- ・ 運用実態と意識にはズレがある。

⑤ 考察

日本語学習者を対象にした本調査と、日本語母語話者の多様なコーパスを用いて「から」「ので」の使用傾向を量的に調査・分析した小西(2009、2010)とを比較すると、次のような点が示唆される。

- ・ 日本語学習者が「から」「ので」に関して意識している使い分けのルールは、日本語の教科書から得たものと、現実の言語運用の中から導いたものとの2種がある可能性がある。
- ・ 「から」「ので」は前接文体との組み合わせという観点から考察することで、使用傾向を把握できる可能性がある。

(2) 伝聞表現の「そうだ」とその類義表現

① 目的

伝聞表現の「そうだ」とその類義表現を研究対象に、以下の点を研究課題として調査・分析を行った。

- A) 使用環境と「そうだ」の出現形とはどのような関係があるか。
- B) 「そうだ」が用いられにくい環境で、どのような代替表現が用いられるか。
- C) 「そうだ」の使用に関して、日本語母語話者と学習者にどのような差があるか。

② 調査協力者

調査協力者は日本の大学に所属する日本語学習者 14 名（表 1 の 1 から 14）と、日本語母語話者 10 名（表 2）である。

③ 調査方法

実施した調査は、3 節（1）③で示した質的調査である。そのうち、口頭で伝えるタスクに関しては、日本語学習者 10 名、日本語母語話者 6 名のみが参加した。

④ 分析結果

研究課題 A) に関して、以下のような分析結果を得た。

- ・ 「そうだ」は媒体と文体とに強い相関を持つ。具体的には、音声言語では「そうです」のように丁寧体を使用され、文字言語では「そうだ」「そうです」のように普通体・丁寧体の双方が使用される。
- ・ 文字言語では「そう。」や「そう+終助詞」「そうだ+終助詞」という出現形が現れるが、音声言語では現れない。

研究課題 B) に関して、以下のような分析結果を得た。

- ・ 普通体基調の音声言語では、「そうだ」は全ての出現形で現れにくい。そのような場合は「(んだ) って」が用いられる。
- ・ 「(んだ) って」は、携帯メールのような、即時的で相手との相互作用性が高いジャンルであれば、文字言語でも使用される可能性が高い。

研究課題 C) に関して、以下のような分析結果を得た。

- ・ 日本語学習者は、中級レベルでは伝聞を表す形式をほとんど用いることができない。
- ・ 日本語学習者は、上級・超上級レベルであっても、親疎や文体に応じて「そうです」と「(んだ) って」の使い分けを行わない場合が極めて多い。

⑤ 考察

本調査からは、レンマと出現形を区別する重要性が指摘できる。レンマ「そうだ」は、具体的な出現形と、媒体・文体とに強い相関がある。そのため、それらを一括してレンマとして扱うことは難しい。

これまでの日本語教育は、レンマを中心に文型や文法の指導を行ってきたが、学習者の多様化に対応した柔軟なシラバス作成を目指す場合には、学習者の必要とするレジスターに対応した言語形式をシラバスに組み込

む必要がある。

また、日本語母語話者と日本語学習者の伝聞表現の使用傾向を見ると、上級以上の学習者であっても、使用環境に配慮した言語形式の選択が十分に行えていないことがわかる。これらは、レジスター教育を積極的に展開してこなかったこれまでの日本語教育の課題であると言える。

(3) まとめ

本研究の目的は以下の 2 点を明らかにすることであった。

- ① 日本語学習者が場面による言語形式の使い分けをどのように行っているか。
- ② 日本語母語話者と日本語学習者の場面による言語形式の使い分けの相違点。

日本語学習者を対象とした「から」「ので」の調査により、①に関する知見を得た。日本語学習者は、意識と運用にズレがあり、また、これまで日本語学や日本語教育で用いていた文法の単位とは異なる単位で、類似する形式の使い分けをしている可能性がある。

また、日本語母語話者および日本語学習者を対象とした伝聞表現「そうだ」の調査により、②に関する知見を得た。日本語母語話者の言語運用を見ると、一つのレンマに集約されると思われてきた各出現形は、それぞれが異なる使用環境を持っている。ここから、学習者の多様化に対応する柔軟なシラバス作成のためには、レンマではなく出現形に関する使用環境の記述を行うことが必要であると言える。

一方で、日本語学習者の言語運用を観察すると、多様な出現形の中から、レジスターに合わせて必要な形式を選択することが難しいことがわかる。これまでの日本語教育は、文型をレンマに集約させた教育を中心に行ってきた。場面に応じた適切な言語形式の選択のためには、各出現形の使用実態に関する詳細な記述を含め、その提示の在り方を模索していかなければならないと言える。

※引用文献

小西円 (2009) 「「から」「ので」の形態的特徴と使用ジャンル—BCCWJ を用いた定量的調査—」『社会言語学会 第 24 回大会 発表論文集』社会言語学会 pp. 180-183

小西円 (2010) 「「から」「ので」の形態的特徴と使用ジャンル—日本語教育における類義表現の扱いを考える—」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度公開ワークショップ (研究成果報告会) 予稿集』文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」総括班 pp. 131-138

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 小西 円 日本語学習者による「から」と「ので」の使い分け—運用と意識に着目して—、多摩留学生教育研究論集、第7号、査読有、2010、pp.1-7

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小西 円 (KONISHI MADOKA)
東京学芸大学・留学生センター・研究員
研究者番号：60460052